

## 【スポーツ】

## &lt;高校野球100年&gt;大会生んだ母校愛 京都二中OBの情熱

2015年7月10日 朝刊

全国高校野球選手権大会が今夏で100年を迎える。いかにして全国大会が始まったのか。第1回全国中等学校優勝野球大会の起源を探った。(森合正範)

1915(大正4)年4月下旬。桜が散り、「命短し恋せよ乙女」で始まる歌謡曲「ゴンドラの唄」が発表されたころだった。京都市にある京都二中(現・鳥羽高)の校庭で2人のOBが後輩の練習を見つめていた。京都帝国大生(現・京都大)の高山義三と小西作太郎。このとき、2人の秘めたる思いが一つの壮大なアイデアを生み出した。



1910(明治43)年、京都二中野球部時代の高山義三さん(左)と小西作太郎さん(右)＝鳥羽高校提供

「今年の京都二中は強い。全国的な試合をやれば、優勝するかもしれんぞ」

「京都と滋賀の京津大会。西日本、あるいは全国から強豪を集めて、大会を開いてもらえないだろうか」

高山と小西は同じ1892年生まれの幼なじみ。京都二中ではバッテリーを組み、無敵を誇る。高山には「全国大会があったら優勝していた」との思いがあった。だが、それはかなわぬ夢。日本一を争う大会がなかった。「これではいけない」。そんな思いが込み上げてくる。

そんな2人から見ても、後輩たちの戦力はそろっていた。エースの藤田元は当時では珍しい下手投げ。力任せの剛球型が主流の大正時代に藤田の投球フォームは奇異に映る。まず打たれることはあるまい。京都二中が日本一であることを証明したい。高山と小西が抱く母校愛。これが100年も続く全国高校野球選手権大会の発端だった。

○ ○

早速、2人は行動に移す。高山が毎日新聞京都通信部に駆け込み、小西は朝日新聞京都通信部に企画を持ち込んだ。大正に入り、中等野球はミズノ運動具店主催の関西大会、東海五県連合大会、東京都下大会、北九州の明治専門大会など各地で盛り上がりを見せていた。それを知っていた朝日の記者は積極的に大阪本社の幹部へ働き掛けた。

同じ時期、箕有電鉄(現・阪急電車)が完成したばかりの大阪・豊中グラウンドの活用法を朝日に相談していた。その中の一つに「全国的な中等野球大会の開催」があったという。絶妙なタイミング。朝日の幹部の背中を押した。

とんとん拍子に進み、7月1日、2人の夢である「全国中等学校優勝野球大会」の開催が発表された。朝日は地方通信部と連絡を取り、地区予選へ動きだす。そして、全国10地区の代表が決まった。

○ ○

2人の母校愛と野球への情熱を知る人たちがいる。1946年夏の第28回選手権大会に出場した京都二中の三塁手・黒田修(86)は振り返る。「高山さんは(京都)二中が一番という考え方。今で言う二中命、二中魂があった。後輩に勝たせたい。だから(全国大会を)つくる。情熱やろうなあ」。捕手の金森正夫(84)も語る。「すぐく後輩思い。あの時代によく肉を食べさせてくれた。言葉に説得力があるし、頭の切れる方だった」。高山は弁護士をへて、57歳で京都市長となり4期16年務めた。

小西は朝日新聞に入社したのち、日本高校野球連盟の顧問となった。孫の佐井裕義(62)は幼稚園のころから小西と並び、甲子園のバックネット裏で高校野球を観戦していたという。「よく『おじいちゃんが始めたんだよ』と言っていた。ある開会式で満員の観客を見渡して『こんなになるなんて夢のようだなあ』と感慨深げに言っていたのが忘れられない」。それは天国へ旅立つ直前まで変わらなかった。佐井が続ける。「祖父は入院した病室でいつもイヤホンをして野球中継を聞いていた。心のよりどころだったと思う」

○ ○

第1回の全国大会は8月18～23日、大阪・豊中グラウンドで行われた。高山と小西は大会委員として名を連ねる。同時に高山は京都二中の監督、小西はコーチとしてサインを出していたという。

京都二中は高松中、和歌山中を破り、決勝で秋田中と対戦した。相手チームがカーブを打てないことを研究していたエース藤田は、下手投げから変化球を繰り出す。1－1で迎えた延長13回裏。秋田中のエラーが重なり、サヨナラ勝ち。予選参加を含む73校の頂点に立った。京都二中野球部「野球部記」には決勝戦の結果を記した後、こんな一文が残っている。

「卒業生諸君催す祝勝會場ニ送ラレ大ナル歡迎ヲ受ケ帰宿ス」

日本一であることを証明し、2人は大いに喜んだ。高山と小西の母校愛と新聞社へ駆け込むほどの情熱。だからこそ100年も続く大会になったのだろう。＝敬称略

#### ◆取材後記 黒田さん、金森さん「野球の記憶今も」

取材を始めようとする、黒田さんと金森さんは「昔のことは覚えていませんよ」と申し訳なさそうに言った。

黒田さんは戦後の復活となる1946年夏の第28回大会で、開幕試合の1番打者を務めた。「監督から1番でいくぞと言われたから、緊張するから無理でっせと逆らった」。あれから69年たっても告げられたシーンをはっきりと覚えている。

捕手の金森さんは左手を広げた。「ほら、今でも赤く腫れているやろ。手袋が入らへん。毎日250球受けていたからな」。そう語る姿は誇らしげで少しうれしそう。

当時のサインの話題になると、監督が扇子をたたいたら送りバント、扇子をゆっくり仰いだらヒットエンドラン、マネジャーが立ち上がったラスクイズ…といった具合に2人ともすらすら出てくる。

「昔のことは忘れたけど、野球のことだけはすぐによみがえる。そのときのことがワートと出てくる」と2人は笑った。京都二中野球部で流した汗は青春の特別な一ページ。年を重ねても、色あせることはない。(森合正範)

<京都二中> 1900(明治33)年開校。初代校長の中山再次郎の「文武両道」の方針のもと、野球、テニス、陸上、スキーなどスポーツが盛んだった。野球部は01年に創部。15年の第1回全国中等学校優勝野球大会で優勝し、翌年は全国大会の1回戦で敗退。戦後復活となる46年夏の第28回大会で準優勝。48年の学制改革により、廃校となる。84年に鳥羽高が開校し、京都二中の継承校となった。